

平成26年度熊本博物館ロビー展示

『熊本博物館と黒川紀章展』について

甲斐由香里

1. 今回の展示に際して

熊本城三の丸に位置する熊本博物館は、2007年に逝去した故黒川紀章氏の設計した博物館である。2014年は黒川紀章生誕80年の年にあたり、国内外で様々な建築を手がけた氏が、熊本博物館建設にどのような思いを持って臨んだか改めて振り返る展示を行った。

2. 熊本博物館のあゆみ

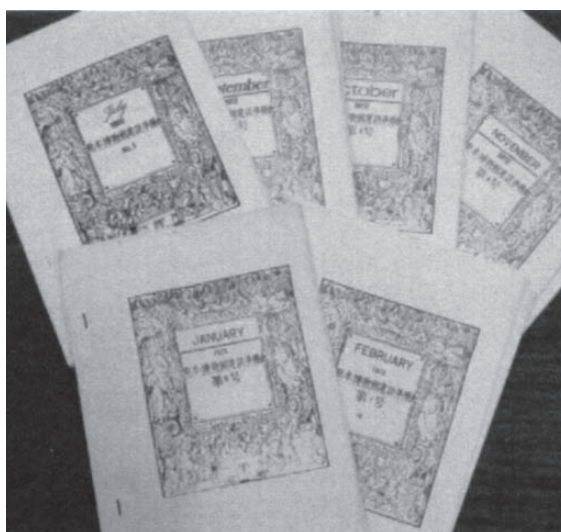
熊本博物館は、自然系・人文系の展示やプラネタリウムを併設した総合博物館である。現在この地に建っている熊本博物館は三代目にあたる。初代博物館は今から63年前、昭和27年（1952）熊本城内の旧第六師団司令部跡に設置され、二代目の博物館は熊本市花畑にあった勸業館の2階3階部分であった。初代、二代目博物館とも自然科学系と人文科学系の展示を行っており、博物館設立当初から自然と人文、両方を兼ね備えた総合博物館として開館していた。



初代 旧第六師団司令部跡の博物館

3. 新館設立に向けて

昭和35年から52年の17年間、勸業館内で活動を行っていたが、次第に展示スペースや収蔵庫が手狭になっていった。また、専用の建物をという新館建設の機運も盛り上がり、昭和47年には博物館建設準備委員会が結成された。熊本博物館建設準備委員会では毎月定例会議が設けられ、建設地、規模、内容、建築家の選定方法などが話し合われた。特に建設地については白熱した議論が繰り広げられ、次回、また次回と議題が繰りこされたと記録されている。



博物館建設準備委員会 定例会議議事録

会議を重ねること9回。建設準備委員会を設置して1年。ようやく現在の博物館の性格や建設地が決定した。

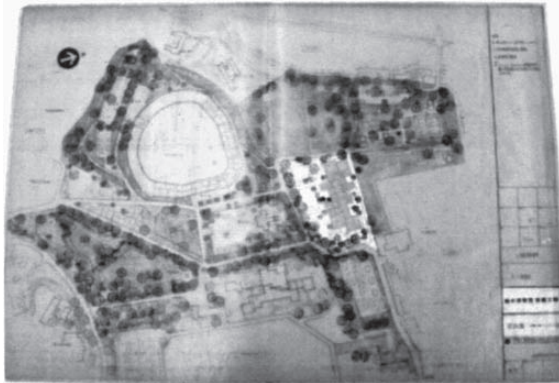
「熊本博物館の性格」

20年の歴史を持つ熊本博物館の性格を生かし、積極的に子どもから老人に至る生涯教育の学習の場として、自然科学と人文科学の両立する総合博物館。また、九州の中央に位置するという地理的条件を生かし、熊本の権威ある博物館として、より熊本のさらに全国的な視野を持つ総合博物館。

「用地」

三の丸地区を最適と考える。

（熊本博物館建設に関する答申より抜粋）



博物館建設予定の三の丸地区

博物館建設地が決定し、いよいよ建築家の選定となった。選定基準として、博物館・美術館、これに類する建築設計に実績がある建築家や設計事務所が候補として22社挙げられた。この中から、熊本博物館と同規模以上の博物館建築設計の実績があり、設計・管理が一貫して受託できる等で候補者を絞っていった。

協議の結果、決定した人物が当時40才の黒川紀章であった。昭和49年（1974）、準備委員会設立から2年後のことである。選定理由として「博物館活動に関する諸団体に関係し、海外の博物館等の事情にも詳しく、広く諸外国からも高く評価されている、日本建築学界における新進気鋭の第一人者である。」ということであった。当時の熊本日日新聞のインタビューに「名古屋出身の自分が、加藤清正ゆかりの熊本で仕事をするようになったのはなにかの因縁かもしれない。」とコメントしていた記事が残っている。

4. 黒川紀章とは

昭和9年（1934）名古屋生まれ。京都大学建築学科を卒業後、東京大学大学院に進学。在学中、28才で黒川紀章建築都市設計事務所を主宰。昭和35年（1960）26才で建築のメタボリズム・グループを結成。「機械の時代」

から「生命の時代」へと建築のあり方を提唱し続けていた建築家である。

熊本博物館の建設が決定した同時期には、中銀カプセルタワービルや福岡銀行本店、国立民族学博物館、埼玉県立近代美術館などの建築・設計を行うなど、多忙な日々を送っていた。

5. 博物館の基本構想

熊本博物館の外観デザインについて、黒川紀章は次のように語っている。

「モダンな建造物にすることで、熊本城、刑部邸と歩いてきて、現代へとつながる歴史の流れの中を歩くイメージ。熊本城の近くということで高さ制限をとり、お城の天守閣から敷地内へとゆるやかに下っていくのを体験できる。」

熊本博物館は熊本城三の丸地区に建設されるということで、城の景観に合うようなデザインが求められていた。そこで、以下のような基本構想が打ち立てられた。

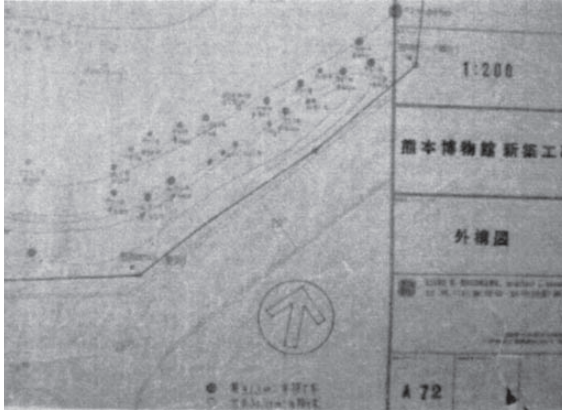
「熊本博物館基本構想の方針」

- 1 二の丸屋形石垣の再現
- 2 主要樹木の保存
- 3 武家屋敷跡の明示
- 4 城内にふさわしいデザイン
 - ア. 低く落ち着いたデザイン
 - イ. 屋根デザインを重視する
 - ウ. 石垣を活かしたデザイン

基本構想にある二の丸屋形石垣とは、博物館建設工事に先立つ発掘調査で検出された遺構のことであり、石垣・排水溝が当時の姿のまま発見された。博物館建設時には、歩道とともにこれらを整備し、保存する流れとなった。

主要樹木の保存については、当時から三の丸

地区にはたくさんの樹木があり、景観を壊さないためにもなるべく伐採せず、移植するなどの手立ても取られた。また、武家屋敷の明示についても、当時の石垣を保存・復元している。



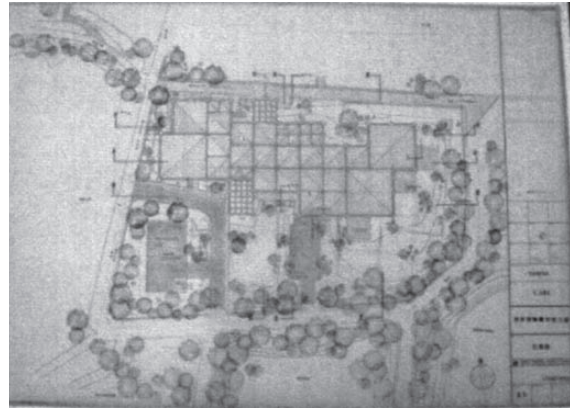
敷地内の樹木がマッピングされた図面（部分）

二の丸屋形石垣沿いを博物館のメインアプローチに採用したことについて、「復元によって形成される歩道を、そのまま新しい建築のメインアプローチとすることによって、人びとは歴史と現代の二重の映像を体験できるであろう。」と、博物館構想についてのメモに記している。

その他の構想の中で氏が採用した片流れの屋根だが、「片流れ」とは屋根の形状の一つで、傾斜が一方にだけ流れているものを指す。氏はこの形状を採用したことについて、熊本城からの流れを意識していると述べていた。また、この形には自然光を取り入れる役割も担っており、照明と自然光で室内調光を行うことも想定されていた。採光について氏は、出来る限り自然な感覚を内部へ取り込みたかった、とも述べていた。

屋根デザインについて、採光目的という理由はあるものの、片流れの角度や方向について、直射日光を入れずに採光するという指示以外、具体的な指示などは残されてはいない。これについては熊本城の破風をモチーフにし

たのか、それとも何か他の意図があったのか。様々な想像がかきたてられる屋根のデザインである。



屋根図面

全ての屋根に傾斜の向きが書かれている

博物館の屋根は現在エメラルドグリーン色をしているが、銅版を使用しているため建設当初はオレンジ色をした屋根であった。長い年月をかけて銅が緑青をふき、屋根の色味が変わり博物館周辺の自然に溶け込むことを意識していたのではないかと想定する。



現在の博物館の屋根（著者撮影）

6. 館内展示室構成

「博物館展示室は、展示内容のためのハコであり、あまり性格の強い空間であってはならない」

氏は展示室の本質を上記のように捉えていた。そこで部屋の規格を10m×10mの立方体

とし、その10m角のブロックがひとつの単位とし、ブロックを合わせることで高さ（吹き抜け部分）や奥行きを生じさせ、展示内容と対応する空間を構成した。吹き抜け部は単なるホール空間ではなく、下階から上階への視覚の変化をもたらすことで、立体的な展示構成を可能にする空間である。

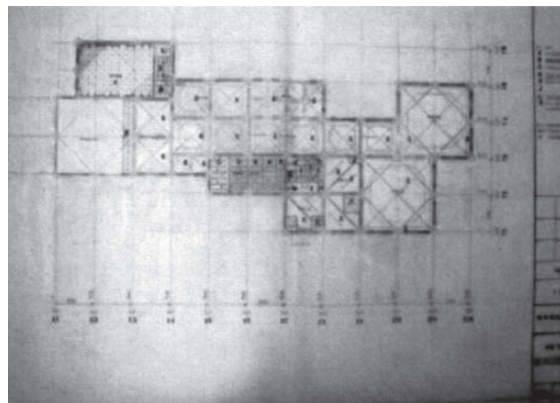
また、10m角のブロックはそれぞれが独立した屋根構造と空調システムを持っており、広いつながりを持った展示空間に対して、ひとつの個（節）としての作用を持つことも意図されていた。この、展示エリアをブロックなどの規格で構成し、展示空間全体と空間を構成している個の関連作用を持たせる手法は、当時氏が手掛けていた、日東食品工場や足柄サービスエリア、国立民族学博物館、埼玉県立近代美術館へとテーマが続いているという。

展示室の内装については、外観が熊本城との調和を意識したものになっていることに鑑み、室内においても、展示品ありきのものであるため、あまり性格の強い空間であってはならないことということで、明暗を3段階に分けたグレーを壁の色に採用している。

先の博物館基本構想でも記したが、博物館建設にあたり熊本城の景観に配慮したため、建物自体があまり高くない作りとなっている。その制約の中で防眩効果を考慮した結果、2階は天井裏のない構造となった。これは本来ならば隠れる部分があらわになってしまう。その条件を逆手に取り、あえて見せることを選択したダクトデザインを採用している。それがステンレスのダクトである。10mごとにダクトのサークルを作り、これを意匠デザインとして用い、博物館の展示品のひとつと位置づけている。また、ダクトと同じく梁もあらわになっている。

観覧に耐えうるデザインや素材を設備や構造

に用いたことも、広義に解釈をすると館内デザインと見なしてよいのではないかとも思う。



2階ダクト配置図

全ての正方形区画の中にダクトが配置されている



2階ダクト・梁写真

7. おわりに

当時の建築図面や関連書籍を読み進めていく中で、様々な制約がある中、外装や内装、ディテール一つにまで建築家の想いが多様なアプローチで表されていることが改めて分かつ

た。それと同時に、熊本博物館という存在は、それ単体で完結するとともに、氏の建築における空間構成イメージを明示する建造物群の一つであることも感じられた。

今後、同じ空間構成を持つ建造物群などの関係性や、使用されている建築へのアプローチ手法の相違などを調査していきたいと思う。

展示に際し、貴重な資料・画像を提供いただいた黒川紀章建築都市設計事務所をはじめ、写真家の大橋富夫氏にこの場を借りて感謝申しあげる。

参考文献

黒川紀章. 黒川紀章の世界. 毎日新聞社, 1975, 194p.

対談：人間と建築：その20 黒川紀章. 新建築. 1977, 52, p.245-250.

黒川紀章. 特集, 「利休ねずみ」の世界：利休ねずみ考. 芸術新潮. 1978, (342), p.29-43

特集, 作品：熊本市立熊本博物館. 新建築. 1978, 53(11), p.177-192.

特集, 作品：熊本市立博物館 / 「旅のノート」
個と全体に関する断章. 建築文化. 1978, 384(33), p.57-74.

特集, Kisho Kurokawa 黒川紀章. Space Design. 1978, (163), p.7-174

「熊本市立熊本博物館」. s-a：建築とステンレス (STAINLESS AND ARCHITECTURE). 1979, 6(4), p.10-12.

黒川紀章. 黒川紀章ノート ―思索と創造の軌跡―. 同文書院, 1994, 571p.

黒川雅之. 現代建築家ガイド111人―安藤からズントまで―. 丸善株式会社, 2004.

社団法人日本建築家協会. 建築家のメモ：メモが語る100人の建築術. 丸善株式会社,

2004, p.82-83.

五十嵐太郎. 現代日本建築家列伝. 株式会社河出書房新社, 2011, p.29-46.

黒川紀章. 行動建築論：メタボリズムの美学. 復刻版, 彰国社, 2011, 302p.